校長室だより～燦燦～ №６４３

刺身のつま

2022.10.25

７月の全校集会で、コンクールを間近に控えた吹奏楽部を激励するために、演奏会が開かれた。体育館に全校生徒を入れて行いたかったが、コロナの状況が悪化し、やむを得ずリモートで行った。担任以外の教員や進行などを務める生徒会本部の生徒は、体育館で吹奏楽部の演奏を生で聞くことができた。

演奏が終了し、校長先生の話となった。お決まりのパターンである。前もって原稿を用意していたりはしない。直接、演奏を聞いて感じたことを話そうと思っていた。予定通り、校長としての思いを話した後のことである。

とっさに、側にいた副会長の生徒をマイクの前に出した。「感想を言ってみて」こんなことは今までやったことがない。全く予定になかった。その生徒は、吹奏楽部の演奏を聞いた素直な感想を述べ、コンクールに向けて激励までしてくれた。校長の話よりいいのではないか。そう思った。

突然、マイクの前に立たされても話せるのである。もちろん、どの生徒もができることではないだろう。この副会長の生徒は、普段から私とコミュニケーションを取っている生徒である。私の中に、話せるだろうという見込みがあったのだと思う。闇雲に生徒を前に出し、うまく話せなかったら、恥をかかせてしまう。

その生徒は、びっくりしただろう。それでも話すことができたのは、大前提として吹奏楽部の演奏がすばらしかったのである。何か心に響いてくるものがあった。副会長の生徒も、同じことを感じていたはずである。これはリモートでは伝わらない。その場にいなければ、感じ取ることはできない。

とっさの行動からわかったことがある。もっと生徒に活躍させてもいいのではないか。前もって生徒に話させる場を設ければ、きっと原稿を用意するだろう。これがよくない。だが、私自身でもそうするときがあるのだから、中学生ならば致し方ないだろう。できれば、その場で話させたい。

日本の若者が諸外国の若者と比べて、自己肯定感が低く、自信をもてずにいることは知られている。「自分を大人だと思う」「自分は責任がある社会の一員だと思う」「将来の夢を持っている」「自分で国や社会を変えられると思う」「自分の国に解決したい社会課題がある」「社会課題について、家族や友人など周りの人と積極的に議論している」などの質問項目が、他国と比べて軒並み低い。

こうなる原因の一端は、学校にもあることは疑う余地がない。行事などでは、必ず校長先生の話がある。まるで“刺身のつま”のようである。必ずついてきて、飾りかと思いきやちゃんと意味がある。校長からのメッセージを生徒に直接伝える大事な機会である。だが、生徒の心に残る話、生徒の心に火をつける話をするのは、並大抵のことではない。

そうであるならば、行事にもよるが、生徒代表の話にしてもいいのではないか。きっといい話をしてくれる。前述の副会長以外にも、期待に応えてくれそうな生徒はというと、片手では足りないくらいである。マイクの前に立った生徒は、自信がつくだろう。達成感たるやいかほどだろう。そのうち、チャンスがあれば、またとっさの行動に出たい。